

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

主 論 文 の 要 旨

論文題目

ネパールの丘陵地域における農村世帯の金融行動
～生計戦略は農村世帯の金融行動にどのように影響を与えているのか～
(Financial Behavior of Rural Households in the Hill Region of Nepal
- How does a livelihood strategy affect financial behavior of rural households?)

氏 名

太田 智之

論 文 内 容 の 要 旨

問題の背景

本論文の目的は、ネパールの丘陵地域における農村世帯の生計戦略が融資に対して与える影響を明らかにすることを通じて、ネパールにおける今後の農村金融の在り方を模索することである。ネパールでは従前より農村地域へ金融サービスを広げることが、政策課題であると共に研究上の問題意識でもあった。一方、1990年代以降、市場経済化の進展に伴い農村金融を巡る環境は大きく変化した。所得下位層における所得や消費水準の増加は貯蓄・融資ニーズの高まりを想起させる他、協同組合の急増は農村金融市場の広がりをもたらした。更に、農村金融政策においても、その焦点が農村地域への金融サービスの普及から、金融サービスの活用に広がっていた。

一方、農村金融が貧困削減に資する為には、低カーストが金融サービスにアクセスし活用できる必要がある。しかし、ネパールではカースト差別により、低カーストによる金融サービスへのアクセスと活用が妨げられている可能性も否定できない。これに対しネパールの農村金融を巡る議論では、農村地域へ如何に金融サービスを拡大させるのかという問題意識の下、官製マイクロファイナンス事業の評価やグラミン・モデルの有効性、或いは在来金融組織の発展などに焦点が当てられてきた。これらの議論では、貸手の視点から農村世帯の金融行動が捉えられており、低カーストによる金融サービスへのアクセスと活用に焦点は当てられておらず、農村金融の実態と先行研究の間に乖離が生じていると言える。この為、本研究では、低カーストによる金融行動の実態を農村世帯と金融行動の関係性から明らかにしつつ、このような乖離を解消することが目的である。

研究課題

本論文では農村世帯の状況を把握する為に、生計戦略の概念を用いた。何故ならば、生計戦略は農村世帯の経済的資源と社会的資源を含めて包括的に把握できる他、生計戦略により最適な金融行動は異なる為である。即ち本論文は、低カーストの金融行動を生計戦略の視点から、高カーストとの比較の中で、解明することを目指すものである。このような背景から本論文では「ネパールの丘陵地域における生計戦略が農村世帯の融資にどのように影響を与えているのか」という研究課題を設定した。

研究の方法

本論文ではこのような研究課題に対し、カトマンズ郊外のバディケル村を対象に2013年8月から11月と2014年1月から3月の2回に渡りフィールド調査を実施した。第1回目の調査では、調査村

における生計戦略及び金融行動の実態把握を目的に、質問票を用いた全戸調査（663 世帯）を実施した。また第 2 回目の調査では、農村世帯の生計戦略と金融行動の関係性を明らかにすることを目的に、高カースト 52 世帯と低カースト 51 世帯の計 103 世帯に対しインタビュー調査を実施した。

調査結果

調査村の生計戦略では、広い土地を持つ世帯でも自給自足は出来ておらず、全ての世帯が土地制約に直面していた。高カーストはこのような土地制約に対し、高い教育水準や社会的地位を活用しながら、農業外雇用（ジャグリ世帯）に就き市場経済化に積極的に適合しながら現金収入を得ることで対応していた。一方、高カーストではジャグリ世帯の増加に伴い、農作業や社会行事における共同作業が減少しカースト内結束は弱体化していた。これに対し低カーストは、竹細工による現金収入や自家消費用の家畜飼育、社会的扶助による助け合いなど農村世帯が有する経済的資源と社会的資源を組み合わせながら対応していた。このような生産活動は村内で実施されていたこともあり、低カーストではカースト内結束は維持されていた。調査村におけるこのような結果は先行研究と整合的である。

また調査村の金融行動では、両カーストとも 80%以上の世帯が金融サービスへアクセスしており、低カーストでも金融サービスへの幅広いアクセスが見られた。この背景は次の 2 つである。1 つ目は、調査村では主要な貸手は協同組合などの在来金融組織である中、これらの在来金融組織では共同体的信頼関係に立脚し柔軟なルールに基づいて運営されていたことである。また 2 つ目は、それまでの高カーストによる協同組合の運営に対する不満や、竹細工の現金収入による貯蓄ニーズの増加から、過去 5 年間で 3 つの協同組合が低カースト自身により設立されたことである。一方、この結果、現在では両カーストが利用する在来金融組織は別々である他、その返済状況は低カーストの方が高カーストよりも良好であるという差異も見られた。

このように調査村におけるフィールド調査の結果、生計戦略では両カーストの間にカースト内結束とジャグリ世帯割合における差異が見られた他、金融行動では両カーストで返済状況に差異が見られた。

分析結果

本論文ではこのような結果を受け、両カーストの生計戦略の差異が金融行動の違いに与える影響を分析した。即ち、両カーストのカースト内結束とジャグリ世帯割合が、返済にどのように影響を与えているのかと言う点に焦点を当てた。尚、調査村では貯蓄をしている世帯割合は高いものの、家計のキャッシュ・フローの標準化には主に融資が活用されていたことから、ここでは融資に焦点を当てた。

まずカースト内結束は、特に在来金融組織への意識の醸成を通じて融資に影響を与えていた。即ち、高カーストではカースト内結束が弱いことから特に在来金融組織の融資に対する意識が低く、このことが安易な借入行動や返済遅延に繋がっていた。別の言葉で言えば、高カーストの生計戦略では、共同作業を基盤とする伝統的な社会関係に依存する必然性が低いことが、在来金融組織の柔軟なルールを「悪用」することに繋がっていたと言える。一方、低カーストはカースト内結束が強いことから、

共同体的信頼関係に立脚して運営されている在来金融組織の融資に対する意識が強く、融資を返済しないと社会的評判にかかわることから返済が促進されていた。更に、低カーストがアクセスしている協同組合は、低カースト自身により設立・運営されていたことから、「自分達の協同組合の融資は大事にしたい」という連帯意識も融資の返済を後押ししていた。

一方、ジャグリの有無は、融資の活用方法を通じて影響を与えていた。両カーストともジャグリ世帯は住宅支出や教育支出を重視する傾向が強く、融資の多くもこのような非生産目的に活用されていた。更に、ジャグリ収入は毎月貰える安定収入であることから、ジャグリ世帯では融資を返済しなくとも生産活動や生活に対する影響は少ない。このような背景から、両カーストともジャグリ世帯では返済が遅延していた。一方、両カーストとも非ジャグリ世帯は、多くの世帯が竹細工や家畜飼育などの生産活動に従事しており、融資の多くも生産目的に活用されていた。更に、これらの生産活動では継続的な融資が必要なことが、目の前の融資の返済を後押ししていた。

結論

このように両カーストの生計戦略は、カースト内結束とジャグリを通じて融資に対して影響を与えていた。即ち、高カーストのジャグリ世帯では融資を非生産目的に活用し返済しなくとも生活に対する影響は少なく、またカースト内結束も弱く返済が遅延しても社会的制裁も厳しくないことが、在来金融組織の柔軟な返済ルールを「悪用」することに繋がっていた。この為、高カーストのジャグリ世帯は、調査村で最も裕福であるにもかかわらず、その返済状況は最も遅延していた。一方、高カーストの非ジャグリ世帯と低カーストのジャグリ世帯の返済指数は偶然にも同じであったが、その金融行動の背景（なぜ返済できているのか）は異なっていた。即ち、高カーストの非ジャグリ世帯ではカースト内結束は弱い一方で、融資の多くを生産目的に活用していたことから、次期の生産活動の為に新たな融資が必要であることが返済を後押ししていた。これに対し低カーストのジャグリ世帯では融資の68.2%を非生産目的に活用しており、返済しなくとも生活には影響は少ないものの、カースト内結束が強く特に在来金融組織の融資を返済しないと社会的制裁が科される恐れがあることが返済を促進させていた。一方、低カーストの非ジャグリ世帯では、調査村で最も収入水準が低いにもかかわらず、最も返済状況が良好であった。これは低カーストの非ジャグリ世帯では、竹細工や家畜飼育が盛んであり、融資の多くを生産目的に活用していたことから、目の前の融資を返済しないと次の生産活動の為に融資を借りられない為である。更にカースト内結束も強いことから、融資の返済が滞ると村での社会関係に支障をきたすことも返済を後押ししていた。このように低カーストの非ジャグリ世帯では、生産活動への融資の必要性和カースト内結束の強さの双方が返済を促進させていた。これらのことから調査村では、カースト内結束という農村世帯を取り巻く従来から存在する社会関係と、ジャグリ世帯という市場経済化の進展により広まった経済的事象が、複雑に絡み合っ金融行動が形成されていると言える。

これらの調査村で得られた結果を、本論文の研究課題に引き付けて考えると、低カーストが金融サービスにアクセスし、それを活用できていたのは次の3つの要因によるものと言える。1つ目は低カースト自身による協同組合の設立が金融サービスへのアクセスを促進させたこと、2つ目はカースト

内結束の強さが融資の返済を促進させていたこと、そして3つ目は低カーストでは非ジャグリ世帯割合が高いことが逆に融資を生産活動に活用し返済を促進させていたことである。低カーストはカースト内で結束して経済的、社会的自立を図りつつ、目の前の生活を改善していくことが生計戦略の主要な目標であったことを勘案すると、低カーストが金融サービスにアクセスし、それを活用出来ていたのは、低カーストの生計戦略に基づく合理的な行動の結果であると言える。

(4,009 字)